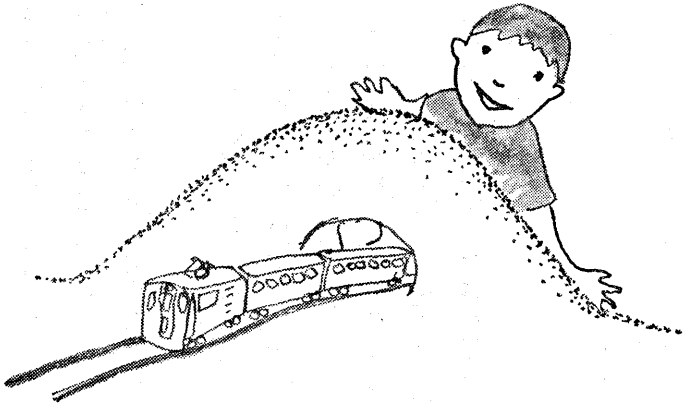
教育実習ノート

Yさんから K先生へ

○月○日　あめ　　みどり組

本格的な雨になってしまう、いつもなら外で元気よくとびまわっているのに――と思うが、子ども達は室内で、それぞれの遊びに熱中している。粘土でパンやさんをやっている女の子、ボール紙でマシンガンやピストルを作っている男の子、時々、撃つまねをして働きかけてくる、みちこちゃん。みさこちゃんと手あ



そび（お寺のお尚さん、アルプス一万尺）をしていると、いつの間にか、けいちゃんが傍でじっと見ている。としゆきちゃんやゆうじちゃんも加わって順番にする。ついに、けいちゃんもやってみたくなったのか、私の手を握って上下にふる。「けいちゃんもやる？」ときくとうなずく。手を打って次に相手の手に右手をのせる、という一連の動作はうまくできない。それでもその遊びにしばらく集中する。ともおちゃんがこっちを見ているので誘ってみたが、おままごとの玄関をつくっているのだと言って、積木を運んで来る、一緒に手伝うが、一人でやりたいらしい。玄関ではなく、中が見えないように高く積む。各部屋から集めた毛糸の象さんがねている。紙芝居の時も、前に行ったり、後ろから見たりしていて落ちつかない。

K先生からYさんへ

ともおちゃんは、象さんを、「赤ちゃん」と呼んでいました。「赤ちゃん」とは、人間の子どもを意味するのではないでしょうか。人間がこわくなった証しだと喜ぶのは、私のひとりよがりでしょうか。紙芝居も、自分が選んだものしか先生にさせないでいました。悲しい物語りがきらいで、その紙芝居をしていると、やめるまで叫んでいました。喜ぶことだけしたいので、ともおちゃんが選んだものだけをやっていまし

た。この頃では、どれでも好きなのですが、絵を見て、人の話を聞いて想像することはできないでいます。生の人の言葉より、動かない活字の方が、機械化した文字の方が確かであり、魅力があり、安心なのでしょうか。

YさんからK先生へ

一週間を終えてみて、今迄、教科書や講義でしか学ばなかったことを、子ども達の活動を見ることによって、ようやく理解できた部分もでてきました。(まだ疑問を疑問としてまとまっていないものもありますが)子ども達は、私が考えていた以上に、体を自由に動かし、思考力を持っているということです。子どもを一人の半分に考えてはいけないということが体で解りました。子どもは世間のおとなが思っている以上に、一人の人間なのです。私の話したいこと、気持はわかってくれます。ただ、自分の我ままを抑えることができません。逆に言えば、自分の心に正直だと言うことでしょうか。そういった場合に、どういう方法で、こちら側の伝えたいことを伝えられるか難かしいと思います。また、子どもが、私の働きかけを必要としていないときに、私の方から出向いていくというのはいけないことですね。人との関り合いを、言葉に頼り過ぎている私達——。子どもには、それ以外の何か他の共通信号があるように思

えてなりません。

K先生からYさんへ

四・五人で指人形をしています。ピアノの後ろでやっているより、ここに舞台をつくって、お客さまがいたらもっと発展するでしょうと考えます。一緒に積木で舞台をつくりました。椅子を並べました。そうしたら、せっかくの人形劇は終ってしまいました。私は余計者だったのです。先生の〝ことば〟一つで遊びを発展させるどころか、しぼませてしまいました。

「共通信号」――、何でしょうか……。子どもの中にいると、幼なければ幼い程、神さまに近い存在だと思うことがしばしばあります。「毎日、感動の中にいる」と言っても言い過ぎでないでしょう。しかし、「教育の場」なので、ただ、感心ばかりしていても、保育になりません。一人、一人が、「先生に愛されている」という信頼関係が、共通信号になるのでしょうか。

Yさんから K先生へ

幼稚園の先生というものは、限りなく学ぶ人でなければならず、僅かな実習では、とてもなれません。来春から週に一度、来させていただきたいのです。どうぞ、お願い致します。